

(平成21年1月7日発行)

# 会報

## 第15号

北海道高等学校世界史研究会  
事務局 北海道札幌西高等学校

☎064-8624

札幌市中央区宮の森4条8丁目1番地  
☎(011)611-4401 / FAX(011)611-4403

### 高世研40周年記念大会に向けて

北海道高等学校世界史研究会  
会長 宮浦俊明  
(北海道札幌旭丘高等学校長)

明けましておめでとうございます。21世紀も9年目を迎えました。

昨年、8月8日の第39回研究大会は、近年減少の一途であった参加者が60名を越え、本年の第40回の記念大会に向けて大きな力を得たと思います。

昨年、「変革の19世紀を経た激動の20世紀が終わり、今21世紀は更なる変革の時代になることが見えてきました」と書きましたが、いまや100年に一度の経済危機といわれる状況を迎えて、20世紀を学ばざれば明日は見えない歴史的な場面に我々は現実に立つことになりました。日々の出来事が歴史教材になります。

また、「我々は歴史の転換期を予想させるこの時代に生まれたことに、しかも歴史の教員であることに喜びを感じ、その喜びを生徒に伝えたいものです。どのように喜びを伝えましょうか。私は、すぐれた語り手としての世界史教員は、現在の我々がおかれている時代状況を空間的に把握できる力が必要ではないかと思えます」とも書きました。しかしながら、私は今の現実を歴史的にどう受け止めるべきか、今後来るであろう変化をどう予測するのか、「怒りの葡萄」は現実になるのか、残念ながら今の私には分からない。1930年代も多くの人々は何が起きたのかを分からないまま、運命として振り回されたのではないか、そんな心情を感じるだけの自分の現実があります。

「我々は21世紀の歴史を動かす原動力を生徒に考えさせ、生徒一人ひとりに自己の歴史における立場と役割に気づかせ、自分の未来を描く力を持たせたいものです」と一年前に書きました。でも、生徒に考えさせる前に、私が考えなければならない、私が勉強しなければならない。今夏の高世研40回大会に多くの地歴公民の先生方の参加をいただいて、ともに歴史の力を考えたいものです。

## 第39回研究大会記録

日時	平成20年8月8日(金)
会場	北海道大学 文系共通講義棟 (W202号教室)
講演	柴 宜弘 氏 (東京大学大学院総合文化研究科教授) 林 忠行 氏 (北海道大学スラブ研究センター教授)
研究報告	山口 修明 氏 (北海道白糠高等学校)
司会	吉嶺 茂樹 氏 (北海道札幌北高等学校) 横山 茂 氏 (北海道有朋高等学校)
記録	高橋 磨美 氏 (北海道音更高等学校) 酒井 絵里 氏 (札幌日本大学高等学校)

### 講演1

#### 「バルカン諸国共通歴史副教材の特色とその課題」

東京大学大学院総合文化研究科  
教授 柴 宜弘 氏

#### バルカンという地域

一般的地理的境界はドナウ川とサヴァ川以南の領域である。この場合、ドナウ川より北に位置するルーマニアがバルカンに含まれないことになるが、歴史的にバルカンを捉えた場合、ビザンツ帝国とオスマン帝国の支配下に置かれた経験を

持つ国の一つとしてルーマニアを含める。ビザンツ帝国とオスマン帝国の支配下に置かれたことのない旧ユーゴのスロヴェニアは抜けることになる。

研究者の中には価値観を含む「バルカン」よりも地理的概念の「南東欧」の方を使うべきだとする研究者がおり、例えばルーマニアの人々の場合、「バルカン」という表現に嫌悪感があり、「南東欧」という表現を使用している。

現在は「南東欧」という表現が「バルカン」より価値観を含まない同義語として使われることが多い。

#### 歴史研究者の共同作業による

##### 副教材作成の試み

共通の歴史認識に立つ副教材作成にはトルコ、キプロスや先にバルカンから除

かれるとした旧ユーゴを含む11カ国が参加した。副教材作成のきっかけは1999年のコソヴォ紛争とNATO軍によるユーゴ空爆にあり、この後、バルカン地域の民族和解の方策として歴史教育に多大な関心が寄せられた。

2000年、オーストリアのグラーツ大学のバルカン社会文化研究センターを中心に「南東欧の歴史と歴史教育」というプロジェクトが発足した。このセンターの所長は家族史を専門とするカール＝カーザーという人物であった。セルビアのベオグラード大学社会史協会とブルガリアのブラゴエフグラードにある南西大学のバルカン学国際セミナーが協力して共同研究が始まり、出版の動きが始められた。バルカン地域に共通するテーマとして、子ども史、ジェンダー史、家族史を選ばれ、第3巻目の家族史は資金が続かなく出版できない状態にあるが、2001年にベオグラード大学から英語版の『過去における子供——19, 20世紀』、2002年に南西大学から英語版の『過去における女性と男性——19, 20世紀』が出版され同じテーマの論文集も出版された。

この作業は歴史研究者の共同作業であり、教育現場の教員の参加はなく、現場でどのような資料をどのように扱うかという具体的なプランがあったわけではなかった。共通の歴史を描き出すきっかけを作ろう、歴史学と人類学の橋渡しを行っていこうというのが大きな目的であった。この作業はグラーツ大学が南東欧安定協定の枠内で音頭をとってやっていこうというものであったのに対して、歴史研究者と現場の先生方が一緒になって歴史教育を考えていこうという内発的な動

きとして出てきたのが、バルカン11カ国共通歴史副教材の作成であった。

## バルカン11カ国共通

### 歴史副教材の作成

ギリシア第2の都市テッサロニキのNGO「南東欧の民主主義と和解のためのセンター」(CDRSEE)の資金援助により1998年、「南東欧共同歴史プロジェクト」が発足した。国際社会の政治的枠組みの要請を受けてのプロジェクトではなく、バルカンのNGOの内発的な和解の試みとして始まる。ペロポネソス大学クルリ氏、ベオグラード大学ストヤノヴィッチ氏の二人をはじめ、現地の人々の間でもボスニアの紛争が終結し安定してきた状況の中で教科書の問題を真正面から考えていこうという機運が高まった。教科書の問題がユーゴ紛争を煽っていく大きな要因の一つではないかという側面と歴史教科書の問題が紛争後の地域の和解に大きな意味を持ちうるのではないかという側面から、バルカンの歴史研究者と歴史教員が協力して検討していこうという試みをしないわけにはいかなかった。クルリ氏は近代オリンピックが専門であり、一方で歴史教育にも高い関心を持っていた。セルビアのストヤノヴィッチ氏はユーゴ紛争の時、反戦の活動をしていた。その二人が97年ごろから中心となり、98年に「南東欧の民主主義と和解のためのセンター」が立ち上げられ、南東欧共同歴史プロジェクトがつくられた。これはバルカンの内発的な和解の試みとして考えられた。1999年にはその中から副教材作成の母体となる「歴史教育委員会」が結成され、バルカン以外の地域の人としてはドイツのゲオ

ルク・エッカートという国際教科書研究所の人が一名入っただけであり、あとはバルカンの人達で結成された。それまでのバルカンの歴史教科書は自民族中心主義的であり、隣国に対してすべては自分たちが被害者であって隣国の加害によって被害を受けてきたというステレオタイプが多かったが、それを変えていこう、バルカン各国の異なる教育制度やカリキュラムを比較検討していこうということから始まっていった。

90年代後半から現在もそうであるが、例えばギリシアやセルビアでは国定教科書であり、教科書が1種類しかない状況であり、ブルガリア、スロヴェニア、ルーマニアは多数出ている状況がある。どの国でも教科書に対しては文科省にあたる教育省が強い権限を持っていることから、そういった問題について相互に情報交換をし比較していこうという所から動きが始まっていくこととなった。

最初は、バルカン史における微妙な問題であるハンガリーの遺産やキプロスの問題、マケドニアのアイデンティティの問題、アルバニア人とその隣人たちの問題、バルカンの諸帝国、ユーゴ崩壊の問題、宗教教育と他者観の問題といったワークショップが行われていき、それと同時に教育現場の先生方の研修が行われたりした。この地域では教科書の問題と同様に、それを教えている人々の歴史意識の問題も非常に大きい。こうした研修が繰り返され、2002年から2004年に共通の歴史教材を作る作業が進んで行った訳であるが、これは統一の教科書を作るということではなく、共通の副教材を資料集として出していくというものであった。この2年間は、それぞれの国の

現場の先生方と歴史研究者がそれぞれの国の資料を持ち寄って、それをどう選択し、どういう形で資料集に盛り込んでいくかという作業が進められていき、2005年の6月に出来上がった。これは高校生向けのもので、バルカンでいう15歳～18歳の子どもが通うギムナジウム（中等学校）に向けて作られた。バルカン諸国は言語が異なっているため英語版で作られ、部数は2500部発行された。これが資料集という形をとった理由は、配布資料1～4に示したが、統一の歴史教科書という形で叙述していくのは到底無理であるという判断、これは日本でも1980年代に日中韓で統一した教科書を作ろうとしたが無理であるということで資料集という形に向かったのと同様である。あくまで補助教材として使用することで、バルカンにおける歴史の授業の変革をもたらすという意図があった。各国にあるナショナルヒストリーに基づく教科書に対抗するものであった。資料集の表紙には **Teaching Modern South East European History** と書かれており、その後 **Alternative Educational Material** とある。つまり、オルタナティブな資料集としてこれを作るというものであった。

テーマとしては、このバルカンにおいて非常に評価が低く暗黒の時代と呼ばれたオスマン帝国の統治を第1冊とし、民族と国家が2冊目、バルカン戦争が3冊目、そして第2次世界大戦を4冊目として、4つのトピックスが取り上げられている。1冊目のオスマン帝国の統治と3冊目のバルカン戦争は、バルカンという地域史として考えていかなければならないトピックスであり、2冊目の民族と国家と4冊目の第2次世界大戦はヨーロッ

パ史や世界史という規模で考えていかなければならないトピックスである。地域としてのバルカンの共通性にのみ目を向けるのではなく、バルカン戦争や第2次世界大戦といったバルカンの人々を引き裂いている相互の対立も含めて直視していくべきであり、多面的なものの見方ということがいわれた。つまり自分と異なった歴史観を持った隣国の人々がどうしてそのような歴史観を持つのかを理解するということである。従って、資料の内容には違った内容・視点のものが同時に入っており、非常にナショナリスティックなものも同時に含まれている。つまり、この資料集は使い方次第でナショナリスティックな視点から教えようとすれば出来てしまう。しかし、「そういう見方でもできるが、そうではなくそういう見方もある」、ということで見えていかなければならないのであり、この資料集を使っただけの教育は難しく、かつ重要だということになる。従って、現場の先生方の研修が現在でもかなり続けられている。

現場で使われるために各国版が出なければならず、2005年にキリル文字のセルビア語版、2006年にギリシア語版、2007年にラテン文字のクロアチア語版、マケドニア語版、ボスニア語版、アルバニア語版が出版されたが、部数はそれぞれ数百部でまだまだ少ない状況である。

こうした副教材を各国がどのように受け止めているのかということについては、それぞれの国で教科書や資料集があるのになぜこのようなものを使わなければならないのかというナショナリスティックな批判が各国から出てきている。こうした状況の中でどのようにこの資料を使っ

ていくのかということ、セルビアでの研修では1回のセミナーで高校教員が20名程集まるが、これはオープンソサイアティという組織に関連している人達のネットワークでストヤノヴィッチを中心として集まっているものである。こうした研修の動きはクロアチア、ギリシア、アルバニア、コソボ、セルビアで始まっている。CDRSE というホームページで各国版がダウンロードでき、現在日本語版の翻訳も進んでいる。

配布資料3ページ、「共通歴史副教材を読む」の中で翻訳した資料3について、セルビアの社会民主党のトゥツォヴィッチはバルカン諸国の対立を解消していくにはこの地域に住む人々による政治的な統一を作らなければならないという演説をしている。対立するバルカンでは連邦構想は何度も出てきているが現実のものとはならなかった、しかしそうした系譜が一貫してこの地域にはあるということは重要なことであるということも含めてこの資料集では扱っている。

資料4-a について、ユーゴにおいて第2次世界大戦の研究は非常に大きなテーマであった。パルチザンという人々は第2次世界大戦後、枢軸軍に果敢に挑んで行った清貧で自己犠牲を厭わない存在として神聖化されていった。それが89年以降相対化されていく。ドイツがパルチザンを捕らえていかに残虐なことをしてきたかという内容が示されている。

資料4-b はパルチザンも同じようなことをしたのだという内容を示している。この資料の最後には、いったい何がこの戦争の最終局面でこうした報復行為を起こさせたのか、という問いと合わせて、

広島やドレスデンなどと比較して考えなさいという問いが付けられている。パルチザンの評価の違いはクロアチアで強く出てきたもので、つまりユーゴ崩壊後クロアチアが独立し、国の基盤は第2次世界大戦ではなく中世に置かれていくようになる。彼らはパルチザンを相対化しようとし、パルチザンは清貧な人々ばかりではなかったということを描こうとしたが、この歴史教材では上のような問いかけの形をとっている。

## 最後に

この歴史副教材が、決してバルカンという地域を共通な面にのっつた一つの地域として捉えるだけでなく、共存と対立の複合物として捉えて共通の歴史を描いていき、そしてナショナルな国の歴史教育を批判し相対化していくことで、統一した叙述が今後可能になる可能性もある。が、部数が少ない、公的に認められた国がない、といった問題がある。しかし、国際機関が協力しているところもあり、クロアチアの翻訳には日本大使館がお金を出したりしている。お金がなくて翻訳がままならないという状況もあるが、今後もルーマニア語版、ブルガリア語版、アルバニア語版と各国版が作られて、それぞれの国の歴史教育が変わっていくということもありうるわけで、それを通じて、教育による和解は、容易ではないが10年、20年という長い目で見ていく必要がある。

## 講演 2

### 「地域概念の政治性 — 『東欧』概念を素材に」

北海道大学スラブ研究センター  
教授 林 忠行 氏

東欧という言葉は、ソ連の西方に位置し、社会主義体制を採っていた欧州諸国、ポーランド、チェコスロヴァキア、東ドイツ、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア、ユーゴスラヴィア、アルバニアというのが一般的な定義である。しかしそれでは、社会主義体制のこうした国々がなくなれば「東欧」という概念もなくなるのかという問題が出てくる。つまり、1989年以降これらの国々では社会主義体制が崩壊したのちは「中欧」Central Europe や「中・東欧」Central and Eastern Europe という言い方がされ、他地域との違いについての議論が出てきている。「東欧」「東ヨーロッパ」という言葉で意味している世界はかなり多様で、つまりかなり政治史的捉え方であり、文化史的に言うときスラブ語世界の東欧ということが出来る。また、宗教史的に言うときビザンツ帝国のキリスト教から直接流れ込んでくる東方正教会系の地域を東欧と呼んでいる人がいる。ポーランドのハレツキーという学者は神聖ローマ帝国の外側にあった世界が東欧であるとしている。ここに出てくるポーランド、チェコスロヴァキ

ア、東ドイツ、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア、ユーゴスラヴィア、アルバニアという国々がひとかたまりであるという意識は社会主義が現れる以前になかったのか、もしあるとすればそれはいつからなのか、もしそうであればこの地域は社会主義でなくなったとしても東欧と呼べるかもしれないという問題関心から今日の話は組み立てられている。

イギリスの歴史家ヒュー・シートン＝ワトソンにより大戦中書かれた定番の概説書『両大戦間期の東欧—1918～1941年』では東欧は「ドイツとロシアの間にある地域」、「北はバルト海で、南は地中海で、南東は黒海とエーゲ海で、南西はアドリア海で縁取られる」地域とされている。そして、チェコスロヴァキア、ポーランド、ハンガリー、ルーマニア、ユーゴスラヴィア、ブルガリアが主な対象で必要に応じギリシア、トルコ、アルバニア、リトアニアも扱うとしている。重要な点は彼は社会主義が出てくる前からこの地域を一まとまりの地域として扱っていたということである。

ここで「地域」という場合、英語の region という言葉に対応している。ある区切られた地球上の空間およびその内容物（自然、人間の両方を含む）で、その特徴や内的な結合によってその外と区別できるものである。領域国家もひとつの地域であるということができるがいくつかの国をまとめてある空間であるということもできるし、ある国家の中に特徴のある空間があればそこも地域であるということができる。「地域」という言葉は大きくしたり小さくしたりすることができる便利な言葉である。ここで注意しなければならないのは地域を設定することは必ずあ

る政治性を含むことになるということである。語り手は地域を設定する際、「内と外」、「われわれと彼ら」といった区別をするわけで、そこに何らかの思いを込めようとする。あるいは気づかずにそうしている。

共産党時代、チェコ人の作家ミラン＝クンデラが『存在の耐えられない軽さ』でポーランドやハンガリーは東欧ではなく中欧だという議論を1970年代に提示し、有名になった。これは地域を支配するソ連といった世界とは違うという主張でもある。しかし、自分たちは市民社会の形成や近代性の問題などがあり、西には受け入れられないかもしれないというところから中欧という言葉が出てくる。どういう言葉を使うかでその人の思いが見えてくるということがいえる。

チェコの哲学者で政治家 T. G マサリクによればヨーロッパは西と東から出来ているという。西の方はいわゆる国民国家、ある国民というものをベースにした国家が出来ているが、東の方は複数の Nation からなる帝国があって支配民族と被支配民族の関係があるという議論をしている。マサリクは Nation に基づいた新しい国づくりをしよう、つまり、チェコスロヴァキアを独立させようと言いたかったが、この地域はみな同じかというところロシアは英・米と同盟を結んでいて、マサリクは英・仏を頼りに独立運動を展開しているためロシアを怒らせることも出来ず、あまりはっきりとした図柄をこの時期描くことが出来なかった。しかし、1915年10月になると少しははっきりしたことを言うようになる。

「トリエステーサロニカーコンスタンチノーブルから北のダンツィヒーペトロ

グラードにいたるところに、おびただしい数の小さな nation (国民／民族) がいて、それらはドイツ、オーストリア、トルコ、ロシアの支配のもとにあったし、今もあるのです。この地帯は、東プロイセン、オーストリア＝ハンガリー、バルカン諸国、ロシア西部地域からなり、国民／民族の反目の実際の特有な中心となっています。(中略) 現在の戦争が勃発したのはまさにここでしたし、全欧州にとって継続する不安定と騒乱が生じる場所なのです。」といている。

マサリクは、トリエステーサロニカーコンスタンチノーブルから北のダンツィヒーペトログラードにいたる地帯が問題であるとした。1918年に出版された『新欧州』では a zone of small nations 「小さな諸国民(民族)の地帯」といい、「西と東の間、より厳密にはドイツ人とロシア人の間」で、「ラップランドで始まる北からギリシアへと下る」領域であるとしている。ロシアとドイツの間に非常に不安定な地域があり、そこにチェコ人やスロヴァキア人も住んでいる。これはヨーロッパの安定に問題の場所であり、われわれはここで民主的で国民をベースとした国を作るべきである、そしてイギリスやフランスはこれを手伝うべきであるとする。

ポーランドの政治家ロマン＝ドモスキも「非ドイツ系中欧」という言葉でまったく同じことを言っている。彼らの議論はつまり、ドイツとロシアの間に位置する諸国民／民族の保護者と見なされていたハプスブルク帝国はその役割を果たせなくなった。戦争が始まるとハプスブルク帝国はドイツに対し従属的な関係になってしまい、戦争が終わればドイツの世界

となってしまう。それならばスロヴァキアは独立すべきであるという主張である。

小さな国家群の独立が起こることは国同士の間で戦争が絶えない「バルカン化」が進むことにもつながり、この地域の小さな国民／民族相互の協力は不可欠であると同時にイギリス・アメリカの国民と指導者にヨーロッパのバランス・オブ・パワーのために重要だということを知らせなければならない。

ハプスブルク帝国の解体が視野に入り、バルト諸国やポーランドの問題がバルカン諸国の問題と一つの視野に入るとき、東欧が誕生したと考えられる。1918年にハプスブルク帝国が解体し、チェコスロヴァキアなどが独立をした。現実には地域内での国際対立が続きマサリクも地域全体の協力については語らなくなる。彼は自分たちの独立をイギリス・フランスに売り込む論理として「東欧」という言葉を持ち出した。

では東欧はなくなってしまったのかというと、東欧以外の人々、特にドイツのナショナリストが東欧という言葉を意識し始めた。「狭間の欧州」論が出てきてドイツはこの不安定な「東欧」という地域に秩序を与えるという名目で第2次世界大戦での支配を正当化しようとした。

スロヴァキア人の政治家ミラン＝ホッジャは1942年の『中欧連邦論』の中でドイツとロシアとイタリアの間には8つの緊密な関係にある国々があり、この国々が将来協力し合うということは間違いないことであるとし、連邦国家の建設が説かれた。こうした見方はホッジャだけでなく当時数多く出された。こうした考え方はソ連により最終的には挫折するが、ソ連は次第に自己の安全保障のた

めに東欧地域は不可欠な地域だという意識を持ち始め、勢力圏の拡大に乗り出していくことになる。1980年代のゴルバチョフ時代には、ソ連にとって東欧は安全保障のために必要不可欠な地域ではないという認識に転換し、ここから東欧の共産圏解体も始まったといえる。

「東欧」というものを実態的に定義することはあまり意味がない。もし人々がこの地域を一つのまとまった地域として捉えようとする場合、そこにどんな思い、主張、野心が込められているかという点を考えることが地域学の面白さであり、重要なことである。例えば「東アジア」という表現があらわす範囲は昔よりもずっと広がってきているが、これは戦後日本人の国際政治の見方の変化に伴っている。ただし、かつて大東亜共栄圏という見方があったことを考えると、ある種の連続性や断絶をくり返しながらある地域が語られてきたといえる。

また、世界史を語る上で、教科書を含むある資料に何が書かれているかということも大事であるが、誰が何をしようとしてその資料を書いたのか、そこに込められた書いた人の思いや意図を伝えることもまた重要である。

## 【各氏からのコメント】

### 鳥越泰彦 氏（麻生高等学校）

地域認識を検証するということの意味について、そして来年度に向けて現代、戦後史をどのように教えればよいのか、特になぜ東欧を学ぶ必要があるのかの2点について、関心がある。

地域認識を検証していくことは世界史教員として重要なことである。世界史の歴史教育の中で、日本の歴史教育は地域世界に区分して世界を覆い尽くすといった思想を持っている。例えば「ヨーロッパ中心ではいけない」「アジア中心ではいけない」というように地域で捉えて先人たちは議論を重ねてきた。地域認識は世界を把握する優れた把握の方法である。林先生は地域概念の恣意性ということに触れられたが、生徒に対しても地域概念の恣意性などについて伝えていくことが出来ればナショナリズムの克服にもつながりうる。

われわれは正史を教えようとしがちであるが、さまざまな資料からさまざまなものの見方を学ばせ、どうしてそうした違いが出てきたのかを考える授業が重要である。

東欧をどのように教えればよいのか、1945年～1985年の間にあった社会主義についてどう教えるかということについては、今の高校生にとっては遠い時代のことであり、20世紀の世界を考える上で大事なことである。

### 柴 宜弘 氏

イリノイ大学のマリア＝トドロヴァに  
よれば、バルカンアイデンティはなくバ

ルカンアイデンティティズとならざるを得ないという。バルカンという地域を設定するとき、そこにある狙いはナショナルなものを否定する場としてのバルカンである。しかし、大きなものを設定する場合、フロンティアの違いを際立たせると国民国家を大きくしたものが地域であって、それがまた繰り返しになってしまうということがある。地域はナショナルなものを否定する概念装置として捉えるべきであって、地理的にどこからどこまでがバルカンであるという話に入り込んでしまうべきではない。

### 林 忠行 氏

いろいろな地域を設定すべきである。「ドイツとロシアの間が東欧である」というのも政治的戦略的な一つの見方であるし、他の見方もある。いろいろな地域の自由な組み合わせゲームができるというのが面白い。

社会主義については、19世紀からのさまざまな潮流があるため、ある時代の中で社会主義をもう一度語る、あるいは国際関係の中で社会主義を語る必要がある。そういう意味で近代化の一つの現われが日本の社会主義化であった。帝国システムの中で工業化や近代化が十分に達成できなかった世界がナショナリズムにかけた、それが戦間期だとしたならば、その失敗のあと次のオルタナティブを求めたという解釈でいくと、戦後の社会主義化と戦間期のナショナリズムは連続性を持つと考えられる。

連邦と分裂について、ユーゴスラヴィアやチェコスロヴァキア、ソ連の崩壊については、体制の転換と結び付けて説明ができる。これは民族問題というのはそ

の後に論理として出てくるものであって、それそのものが分裂を引き起こしたのではないという解釈による。例えば、チェコスロヴァキアが崩壊したときまず起こったのは、物の私有化であった。そのとき誰がその指導権を握るかで誰が富を多く得られるかが変わってくる状況にあり、そこでナショナルなシンボルが最大限に利用された。チェコスロヴァキアの場合、このときを乗り越えていれば分裂せずに済んだかもしれないが、私有化がピークに達したとき国は崩壊したと解釈している。

## 【質疑応答】

Q 1 : 林氏の講演に関して第 2 次世界大戦期イギリスやロシアが東欧世界に対して圧力をかけたということに関して一般の民衆、つまりこの地域に住んでいた人々、およびこの地域に住んでいない人々はこの地域をどう認識していたのか。

(函館ラサール・小川)

A 1 : まず、政治闘争の中に当時東欧は置かれていたため厳密に民衆と指導者を区別することは難しい。チェコ人、ポーランド人含めてナチスに全面的に協力して自分たちの生存や利益を図ろうとした人々は決して少なくなく、闘争を行った人々もいた。ただ、まったく戦場になっていない場所であれば戦争とかかわりのない生活を送った人々もいた。

連合国という視点で言うならば、例えばイギリスの人々が一般的にこの地域に関心を持っていたとはいえない。シート

ン＝ワトソンが戦争中に本を書いたのはまさに人々がこの地域に関して無関心であったからであった。これについては他の国々についても同じである。(林)

Q 2 : クーデン＝ホーフの欧州合衆国構想は EC・EU の発想の父として世界史で出てくるが、詳しく教えて欲しい。

(札幌北・吉嶺)

A 2 : マサリクとの関わりでいうと、戦後マサリクのところにクーデン＝ホーフが行って欧州合衆国構想を訴えるが、マサリク大統領ははっきりしたリアクションをとらなかったとクーデン＝ホーフの回顧録に書かれている。マサリク大統領はより現実的な日々の外交に追われており、そういうことをする余裕がなかった。ただし、クーデン＝ホーフは当面チェコスロヴァキア市民としての国籍を持っており、二人のやり取りは続き、それなりの支援がマサリクからあったと考えられる。マサリクも東欧の伝統ではだめで欧州の伝統なんだということは戦間期に言っているので、二人の射程は近いということが言える。ただ、マサリクは自分が生きている間にそういうものが動くとは見ていないのに対し、クーデン＝ホーフの方は運動としてそれを仕上げてしまおうとしていたという点で異なっていた。

(林)

Q 3 : 共通の副教材に関して、すべての歴史的事実を相対化して表記しているということであれば、現場の教師がそれをすべて評価するという形にはなるのか。教える教師側に教えるためのシステムがなければ考えさせて終わりになってしまう

い、その先を展開できないのではないか。

(小樽工・清水)

(釧路北陽・城座)

A 3 : すべての立場かどうかは別にしても、複数の見方の寄って立つ資料が並存されているということにはなる。

例えばセルビアであれば、隣のブルガリアのマケドニアに関する見方の資料が同じように置かれている。なぜブルガリアはマケドニアに対しそのような見方をするのかということ現場の教員が生徒に考えさせるような授業をすることが大事である。セルビアの教科書がいかに一面的なものを見方しかしていないかを生徒に伝えるためにこの資料集を使って授業をやっていこうという教員を、国としての取り組みとなっていない現状ではセミナーなどを通じて増やしていくしかない。(柴)

Q 4 : 歴史副教材が出版されたとき各国からさまざまな批判が出たというのが具体的にどんな批判が出たのかを教えてください。(札幌星園・榊原)

A 4 : 資料のバランスが悪い、なぜあのような資料を取り入れたのか、各国の歴史は独自のものであるにもかかわらず、バルカンの歴史の中に溶け込ませてしまうことへの反発といった批判が出た。(柴)

Q 5 : 歴史副教材に関して、これを作るきっかけにドイツ・ポーランド共通歴史教科書作成のことが関わっているのか。またクロアチア語版作成にあたり日本が資金援助をしているのはどういう理由からなのか。ユーゴに行ってどういったところがびっくりしたのか。

A 5 : ドイツとポーランドの和解が国際教科書研究所代表のゲオルク＝エッカートを中心として進められ、1970年代から共通の理解に基づく指針ができた。その経験が生かされている。

クロアチア語版に日本が資金援助をしていることについて、クロアチアの大使が文科省出身者であるため、こうしたところに支援をしようという話になったのではないかと。国としての方針があつて出したのではないと思われる。

ユーゴに行って、自主管理社会主義が非常に煩雑であったということにびっくりした。1969年、防衛については全人民防衛という体制をとっており、軍事訓練が民衆に課されていた。武器も役所や学校など各コミュニティにまで広まっていたため、それが内戦を激しくさせていた。(柴)

## 研究報告

### 「コンピュータを活用した 世界史授業の研究と展開」

北海道白糠高等学校教諭  
山口 修明 氏

1. はじめに ～教員になるまでの経緯
2. 今回の研究の動機・目的

#### ①研究の動機

私は、これまで2回ほど研究会に参加させていただいているが、大変優れた授業実践や研究がなされており、歴史を専門に勉強したことがない自分が研究発表をすることは到底できることではないと思っていた。

しかしこの度、研究発表の機会をいただいで、自分に何ができると考えた結果、地歴公民科教員であると同時に情報科教員でもあるという立場を活かして、近年急速に発達してきたコンピュータ、インターネットをどのようにして世界史の授業に取り入れられるかというアイデアが浮かんできた。世界史の授業で私が実践した事例を紹介することによって、先生方の授業のヒントにいただければ幸いです。

また、情報は新しい教科であるため、他の教科の先生方の認識・理解も決して深くはないと考えるため、情報科の概要と現状についても知っていただけたらと思う。

#### ②研究の目的

今回の研究発表は、座学中心である世界史（地歴公民科）の授業にインターネットやマルチメディア教材を取り入れるための効果的な方法について、そのツールとしてのコンピュータの活用方法を紹介することを目的としている。

### 3. 情報教育・情報化の現状

#### ①情報教育とは

「情報教育」とは、情報活用能力の育成が目標である。言い換えると、目的に合った情報の選択・利用、表現とコミュニケーションの方法、コンピュータやネットワークの仕組みの理解、情報社会についての理解、著作権も含む情報モラルや情報発信の責任について教育することである。

「情報活用能力」とは、「情報活用の実践力」「情報の科学的な理解」「情報社会に参画する態度」の3つの要素からなる。

#### ②「情報」の目的

情報及び情報技術を活用するための知識と技能の習得を通して、情報に関する科学的な見方や考え方を養うとともに、社会の中で情報及び情報技術が果たしている役割や影響を理解させ、情報化の進展に主体的に対応できる能力と態度を育てる。

(H11 高等学校学習指導要領より)

#### ③情報科の現状

情報はコンピュータの操作を教える教科ではなく、効果的・効率的な情報の検索や発信の方法について教える教科であ

る。しかし、高校入学時の生徒のコンピュータ操作能力の現状からすると、操作方法から学習せざるを得ない。これは本来「商業科」で学習すべき領域である。

また、教員の人材確保の問題もある。現職の教員の免許取得については平成12年度から認定講習会が行われ、計60時間程度の講習で免許の取得ができた。大学における情報科教員養成は平成15年度卒業生を対象に免許の取得が進められているところだが、大部分の都道府県では情報科単独の採用もしくは情報科単独免許での採用が無いところもあり、情報の免許だけを持っていてもなかなか教員になれない実情がある。

このように、大学で専門に情報を学んだ教員がいないため、専門的な知識が備わっておらず、情報科に関して深い指導が難しい状況がある。そのため、教科としてもコンピュータ操作の授業に終始してしまい、他教科の教員から「情報科は就職向けの教科である」という誤解を生むことになっている。また「大学受験と関係がない」という傾向から未履修問題の発覚も相次いだ。

ウェブサイトやブログ、プロフ、モバイルによる情報発信者の低年齢化、内容の複雑化が進む中、出会い系サイトの問題や著作権侵害の問題など情報モラルに関する指導を情報科は行わなくてはならないのであり、教員の人材の問題等から、この部分に十分に踏み込めずに授業を終わってしまうというケースも多い。

#### ④情報科の授業内容

- 情報A…「情報活用の実践力」
- 情報B…「情報の科学的な理解」
- 情報C…「情報社会に参画する態度」

※今後の学習指導要領の改定によって「社会と情報」「情報と科学」になる予定

〈平成18年度に担当した「情報C」の授業内容〉

- ・デジタル化と情報社会(座学)
- ・情報機器の活用(実習)
- ・情報のデジタル化(座学)
- ・ネットワークの仕組みとセキュリティ(座学)
- ・情報機器の活用2(実習)
- ・情報社会における心構え(座学)
- ・情報化の光と影ーモラルについて(座学)
- ・情報機器の活用3(実習)

「情報C」は「情報社会に参画する態度」をメインテーマとして、情報の表現方法・情報社会の理解について学ぶ。その中で、ネットワークの仕組みや著作権、コンピュータウイルスや情報モラルについて座学で取り上げた。

一方で実習としてコンピュータの基本的操作方法として、Word、Excel を中心に(ローマ字打ちも含めて)徹底した実力養成を行った。

定期試験は年2回実施、日頃の授業は商業科教員1名と一緒にTTで行った。実習の提出物や取り組み状況も含めて評価を行った。

#### 4. コンピュータを利用した

授業研究・授業実践

#### ①授業研究について

従来の授業研究のソースである教科書、解説書、資料集、用語集、書籍などに加えて、インターネットのwebページを

加えている。

インターネットは10年前頃より情報量が急激に増大し始め、従来の文字による情報だけではなく、映像・音声・動画といった情報のマルチメディア化が進んでいる。(平成16年総務省の統計によると、JPドメイン—日本にサーバーがあるwebページの総データ量が1998年から2004年までに約45倍に増加している。そのうち、動画データが29.1%、文書データが26.0%、画像データが25.4%という割合になっている)そのため、授業研究に使用できる情報も大幅に増えた。数年前であれば、用語集でもカバーしきれていなかった用語でも、インターネットで検索すれば現在では詳しい解説を読むことができるようになった。北海道教員の64.4%がIT機器を利用しているという統計もある。(全国平均は約70%)

#### ● web ページを使った授業研究の方法

私の授業研究の方法は、まず①教科書を読み、その内容について②板書案を作成、③解説書、資料と合わせてwebページで情報収集やトピックを探して授業で紹介している。基本は検索サイトで用語検索し、webページで吟味した上で、授業のネタとして使うかどうかを判断する。

webページを利用した授業研究のメリットは何よりもスピード、そしてコストである。webページの利用は無料のものがほとんどであるため、充実した情報をすぐに手に入れることができる。また、検索方法を工夫すれば、欲しい情報をピンポイントで見つけることができ、資料探しにかかる時間を短縮することにもつながる。

#### ● web ページを使った授業研究の留意点

##### 1) 内容の真偽はどうか

特に個人で作成しているwebページの場合は、偏った見方や間違いに気づかず掲載している場合が少なからずある。複数のwebページから情報を多面的に吟味し、その情報を利用するかどうかを判断しなくてはならない。

##### 2) 著作権の範囲内かどうか

著作権の範囲内で適切に入手した情報を適切に利用することが重要である。また、そのwebページ自体が著作権的に正しく作られているものかどうかということも重要である。

#### ②授業実践について

〈事例—1〉プレゼンテーションソフトを利用した授業展開(配付資料裏面—資料1参照)

この授業は中学生対象の学校説明会の体験授業として実施した。授業は普通教室で行い、プロジェクタ1台と黒板に貼り付けられるスクリーンとコンピュータ1台を利用した。

内容は、中学校社会科との相違点から始まり、海外旅行の話、そして自身の経験からイタリアをテーマに地理的・地誌的に紹介、さらにルネサンスという時代について中世ヨーロッパ時代の絵画との違いに着目して、どのように文化が変わったかという紹介を行った。パワーポイントの良い点は板書しながら、資料集に無いような資料でも大画面でカラーで生徒に提示することができる点である。

〈事例－2〉インターネットを利用した調べ学習の展開（配付資料裏面－資料2参照）

この授業は北海道高等学校学力アッププロジェクトの公開授業として実施した。今回の研究発表のテーマが決まっていたところであったので、今回の発表に向けての授業実践としてインターネットを活用した世界史授業を行った。

インターネットを調べ学習として活用するため、授業をコンピュータ教室で行った。基本的には普通の授業と変わらず、教科書、資料集、ノートを使っただけの授業となるが、板書を黒板ではなくスクリーンに表示し、地図や航空写真などの補助的な資料の提示もスクリーンで行った。生徒の活動としては、ワークシートを活用しながら、インターネットで調べたことを記入させる作業を行っている。

### ③プレゼンテーションソフトの利用と留意点

プレゼンテーションソフトを活用した授業展開は、授業内でのコンピュータの活用として第一に考えられることである。プレゼンテーションソフトは文字情報の他、映像・画像・音声を再生でき、マルチメディアに対応したツールである。もちろん、今回の授業のように資料集にないような画像・地図などを視覚的・効果的に挿入することによって、学習の理解を補助する狙いがある。しかし、毎回の準備（板書・資料の整理、プロジェクタのセッティングなど）にかなりの手間がかかる点や、突然の変更への対処が難しい点、生徒がノートを書く時間を十分に

確保するなど、留意しなくてはならない点はいくつかある。

〈メリットとデメリット〉

- ・プレゼンテーションは基本的に1回作れば、同じ内容のことを複数クラスで使える。しかし教科書が変わると作り直さなくてはならない。
- ・現在の教室では教卓の上にプロジェクタを置いて小さくしか投影できないという問題がある。
- ・プロジェクタのセッティングについては、空き教室を1室借り切ってそこで授業を行うようにするとスムーズであった。
- ・プロジェクタの性能によっては、黒板に直接投影しても良い。その場合、チョークで注釈などを書き込むことができる。

### ④インターネットの利用と留意点

授業におけるインターネットの利用法は主に2つ考えられる。ひとつは、〈事例2〉のように、授業内で短時間の発問の答えを探すという利用法。もう一つは主題学習・テーマ学習といったように、数時間にわたって時間を確保し、レポートを作成・発表を行うといった利用法もある。たとえば「歴史新聞」作りなども考えられる。教科書や書籍資料のみ使って作成したものより、高度な内容の新聞を作成することも可能になってくる。

ただし、気をつけなければならないことは、最近の生徒は情報を見つけるのは上手であるが、それをどう上手に使うかという点で力が不足していることが多い。例えば、レポート作成の際に、インターネットで見つけた記事をそのままコピー

&ペーストして済ませてしまうことが、度々見受けられる。このようなことにならないように、調べ学習では情報のソースをはっきりと明記させ、そこから得た情報を自分なりに吟味してまとめ、取り扱うことを指導しなければならない。

今回〈事例2〉の授業は情報科と地歴科の両方を自分が担当した生徒集団だったため、情報機器の操作や情報収集の方法など基礎的な知識の育成をしていたことと、教員が生徒集団の能力を把握できていたためスムーズな授業展開ができたが、一般的に地歴公民科の教員がコンピュータを活用した授業を行う際には、情報科もしくは商業科教員との連携が必要になってくる。また、コンピュータ教室の確保も難しい課題である。

## 5. コンピュータを活用した教具の開発

### ①大学受験向け学習ソフトの開発

地理歴史科・公民科は受験向けの学習ソフトが作りやすい教科であると考え。センター試験の練習問題などを自作することも可能であるが、プログラミングやソフトの関係から、開発にはVBA(Visual Basic of Applications)が比較的使いやすくと考える。

### ②eラーニングの活用

「ほっかいどうスクールネット」を活用したeラーニングも可能である。通信制の大学では一般化しつつあるが、各校の地歴・公民科教員の講義映像をインターネット経由で配信し、レポートを作成、定期試験を受験し単位を取得するという方法も考えられる。

白糠高校もそうであるが、地理歴史科

では世界史の必修修や教員の専門、持ち時間の問題から開講されない科目がある。また、総合学科のように多様な選択科目を用意しなければならない場合にも対応してeラーニングの導入の可能性を考えてみてはいかがだろうか。

## 6. おわりに

### ①世界史教員とICT(情報機器)活用能力について

成績処理や授業研究、プリント作りなどでコンピュータを活用されている先生が多いと思うが、さらに一歩進んで「授業にどのように組み込んでゆくか」ということについて、今回の発表では紹介させていただいた。

### ②情報科の現状について

猛スピードで進化する情報社会に、教員側が必ずしも追いつけていない現状がある。情報教育は情報科だけに任せるのではなく、教員全体で情報社会や情報モラルといったものを学び、学校全体で指導していく必要がある。

## 【質疑応答】

Q1：普通教室には暗幕が無いが、光の対策はどのようにしているのか。

(釧路北陽・城座)

A1：プロジェクタが高性能なため、消灯とカーテンを閉める事で大丈夫であった。また、空き教室等に暗幕を貼ってプロジェクタ室を作るのも良いのではないかと。

Q 2 : さまざまなコンピュータ活用法がある中、与えられた材料の中で考える・調べる力について、学力差がある中でどのように対応してゆくと良いか。

(根室・本間)

A 2 : 資料を提示して考えさせることに主眼を置かざるを得ない。できればコンピュータ利用環境を整えた上で、もっと調べ、考えさせ、あわよくば表現(発表)する力までつけさせたい。

Q 3 : ①「歴史新聞」の実践について聞かせていただきたい。②放課後や家庭において、自分でインターネットを使って調べさせる活動は行っているか。

(札幌北陵・大澤)

A 3 : ①歴史新聞の取り組みはまだ実践していないが、白糠高校では、現代社会の授業の中で壁新聞の取り組みを行った。時間が6～8時間も確保できればグループを作って取り組ませてみたい。②放課後コンピュータ室を解放し、期間を決めて旅行計画を作らせたことはある。ただ、家庭にコンピュータが無い生徒もいるので、家庭での調べ学習は積極的にはさせていない。

Q 4 : 「情報モラル授業」で、良い事例、悪い事例があれば紹介いただきたい。また、ウィキペディアを用いることによる悪い面が見られるが、「インターネット情報を正しく利用する為の良い指導例」があれば、良い実例を紹介いただきたい。

(石狩南・中川)

A 4 : 白糠高校では提示した以上の資料を自分で見つけ出し、それによって指導が難しくなるケースは無かった。情報モラルについては事例を紹介する程度にとどまっている。インターネットだけに頼ることは万能ではないことを押さえておきたい。

Q 5 : 指導計画において、評価の観点(評価の規準)はどのように設定しているか。

(静内・森)

A 5 : ワークシートを回収し、自分が期待するところがどれだけ達成されているかを紙を通じて把握し、評価に活用している。

Q 6 : 先生の板書に対する生徒のノートの状況はどうか。

(札幌星園・田中)

A 6 : 特に問題無く、普通に書いている。

Q 6' : 教育大の学生に授業とプレゼンの違いについて質問された。新しい技術を導入する時の注意点として、展開だけで終わらずまとめをきちんと行うことが重要だと思う。

Q 7 : カナダにおいて情報科の概念がかなり違っていた。コア科目すべてで取り扱っており、ICT (Information and Communication Technology) に大変力を入れている。つまり、生徒が発信しやすく、意見を言いやすい道具としてコンピュータを使うという発想である。(例、メーリングリストの活用)

なぜ、今回ワークシートを使用したのか。紙ではなくてもメールで入力させ、

皆で共有して見る方法もあるのでは。

(麻布・鳥越)

A 7 : 今回の1時間しか無い授業では、最も簡単な方法として紙で提出させた。情報の授業ではファイルの形式で提出させたり、自己紹介を共有ファイルにしている。良い作品は大画面で皆で見たり説明することも可能かと考えている。

Q 8 : ①パワーポイントを教室で使用する際、チョークの粉対策はどのようにしているのか。②画像をスキャナで取り込むと解像度が落ちるが、改善する方法は？

(有朋・横山)

A 8 : ①パワーポイント用のリモコン付ポインタを活用している。

② 720~1440DPI (Dot Per Inch) などの高い解像度のファイルにすると良いのではないか。

# 今夏の高世研40周年記念シンポジウム

テーマ 「高校生に教える『20世紀』とは？」

日 時 平成21年8月7日（金）・8日（土）

※8日は、石狩・小樽方面の巡検を予定しています。

会 場 北海道大学 共通講義棟

基調講演 南塚信吾 氏（法政大学教授・千葉大学名誉教授）

「89年革命とは何だったのか？－ハンガリーの経験から」（仮題）

※他に桃木至朗氏（大阪大学教授）、古矢旬氏（東京大学教授）、秋田茂氏（大阪大学教授）からの講演、北海道の高校現場からの報告、及びパネルディスカッションといった内容になる予定です。どうぞご期待ください。詳細につきましては、後日各学校に事務局から案内等を送付致します。

@ 世界史研究会のホームページ @

→  北海道高等学校世界史研究会

<http://www.augustus.to/~sekaishi/index.html>

## □ お知らせ □

この春に『アウトライン世界史 改訂版』（清水書院）が出ます。『アウトライン世界史B』（高世研の先生方が中心となって編集）を改訂したものです（予価900円＋税）。

また『アウトライン世界史A』も増刷されますので、ぜひご利用ください。

## ■ 編集後記 ■

会報第15号の発行となりました。日頃からの会員の皆様のご協力・ご支援に、感謝申し上げます。さて、いよいよ夏の高世研の40周年記念大会が近づいてきました。多くの先生方のご参加をお待ちしております。

最後になりましたが、第39回研究大会の記録を担当していただいた先生方には、お忙しい中にも関わらず記録原稿を作成していただき、本当にありがとうございました。さらに、編集作業の遅れや不備な点など、関係の先生方にいろいろとご迷惑をおかけしましたことをお詫び致します。  
( 札幌南陵・吉田 徹 )